

例会抄録

第 354 回千葉医学会例会産婦人科分科会

日時 昭和 33 年 11 月 16 日 (日) 会場 附属病院屋階大講堂

1) 卵管粘膜の周期性変化について

川名 一郎

卵管粘膜には、分泌細胞、氈毛細胞、絨細胞の三種あり、その中で主として、分泌細胞、氈毛細胞が周期性変化を行う。

即ち氈毛細胞は、月経後期から発育を進めて、凡そ、排卵期頃にその極度に達し、その後は次第に退行するが分泌細胞は、月経後から月経前期まで発育を続け、月経期に退行する。

分泌細胞は卵管腔の中へ、分泌を行う、之は受精卵に対する栄養となつて、子宮に達する迄の生育を保証するものである。

2) 描写式子宮卵管通気法

羽鳥 明

私は卵管の通過性の有無並びに其の機能を知り得ると云われる描写式子宮卵管通気法を行い、なお子宮卵管造影法との併施に依つて次の結果を得た。

造影 通気	通 過	不 通 過	計
通 過	23例(67.7%)	1例(2.9%)	24例(70.6%)
不 通 過	3例(8.8%)	7例(20.6%)	10例(29.4%)
計	26例(76.5%)	8例(23.5%)	34例(100%)

上表の如く、88.3%の一致と、11.7%の不一致の成果を得た。もし子宮卵管造影法に絶対の信頼性があるならばこの検査も相当の信頼性を認めてもよいと思う。

3) 白鼠に於ける性周期と視床下部の総 Ach の消長

関 光 倫

白鼠の視床下部及び前頭葉大脳皮質の総 Ach 量を池田等の抽出法及び Superfusion 法なる定量法により定量した結果、前頭葉大脳皮質では殆んど一定であるが、視床下部では性周期と一定の関係の下に消長し、発情前期で最低値 0.946 γ/g 発情後期で最高値 2.271 γ/g を示した。これは先に発表した小

林隆の結果と一致する。

此の抽出及び定量は非常に困難な問題で、更に現在実験の途上にある故、今後改善すべき点を数例列挙して次の実験をより精確にしようと思つている。

4) 性腺ステロイドの中枢作用 (第三脳室側壁破壊に依る性周期の変化)

斎藤 実

近時 W. R. Hess に始る間脳特に視床下部破壊乃至刺激実験によつて、性周期を支配する中枢が視床下部内側部殊に正中隆起に近い部分に存在すると考えられるに至つた。一方、卵巢より中枢への機能調節機序は殆んど解明されていないが、その作用は性腺ステロイドによる性周期抑制効果を有することは周知の事実であり、また、この作用が主として中枢性のものであることも、幾つかの実験で推定されている。此の様な性腺ステロイドの中枢作用を研究するに当り、その予備的実験としてラットの第三脳室側壁を破壊し、性中枢の停止を観察した。なお、この実験にて連絡発情の 1 例を観察した。

従来視床下部破壊実験で連絡発情をきたす例が報告されているが、これは性中枢の存在のみでは説明しがたく、性腺ステロイド感受性の性周期抑制性の中枢の存在を暗示している様に思われる。私は今後此の様な中枢の存在を種々検討してみたいと思つている。

5) 家兎視床下部電気刺激による排卵に就て

貴家昭而

Hohlweg (1939) によつて間脳に性中枢が仮定されたが吾々は家兎視床下部に直接電気刺激を加え排卵現象を観察した。隔離飼育せる成熟雌性家兎を術前開腹して卵巢を検し、8400 単位の Estrogen を前処置として注射した。黒津式、脳研式装置による双極電導子を用い、脳穿刺は黒津及び Sawyer の Map に随つた。刺激は 50 cycle 3 Volt 0.2 mA の低周波直角脈波を 30 秒 \times 10 とした。術後 2 日開腹し卵巢を検し、脳は電導子を追求した。実験の結果